

特集

書道パフォーマンス

一筆に込めた思い

皆さんは書道パフォーマンスをご存じですか？音楽に合わせて、みんなで大きな紙に一つの作品を書き上げるパフォーマンスです。今回は、書道の新しい表現に挑む高校生たちの躍動感あふれる姿と熱い思いに迫ります。

中央図書館でのパフォーマンス

お正月は、一年で最も日本の伝統文化を意識する時期。その一つである書道のイメージを「静」から「動」へガラリと変えてしまうのが、書道パフォーマンスです。

去年11月5日、神栖市立中央図書館に市内3つの高校から書道部員が集まりました。神栖高校の生徒たちは新調した黒Tシャツ、波崎高校の生徒たちは袴姿に赤いたすきを掛け、

各々の控え室で裸足になってスタンバイ。展示ホールに設けられた観客席はすぐに満席となり、立ち見をする人も大勢います。

司会を務める波崎柳川高校の大倉弓和さん(3年)の「書道部員たちはこの日のために、たくさん練習を積み重ねてきました。今日



司会の大倉さん

は精一杯のパフォーマンスをお見せできるように頑張りますので、応援よろしくお願いします」というアナウンスを号令に、書道パフォーマンスが始まりました。

目の前で作品が生み出される

最初に登場したのは神栖高校です。明るい曲が流れる中、最初の一文字で早くも会場から拍手が湧き、自然と拍手が始まって一体感に包まれます。「桜梅桃李」と軽快に筆を運び、最後に完成した作品を掲げると、ひととき大きな拍手が送られました。続く2作品目は、本間海羽さん(3年)が緑色の大きな「飛」を書く

ところからスタート。「飛躍」の語句は、卒業を控えた本間さんへの感謝と今後の活躍を応援する気持ちを込めて、後輩たちが選んだもの。ちなみに緑色は、3年生の体操服の色。そこにも先輩と後輩の絆が感じられます。

続いて登場した波崎高校の1作品目は、疾走感あふれる曲に合わせて6人の部員がタイミングを合わせて入れ替わりながら言葉を書き連ねていきます。そして最後に加瀬洗翔さん(2年)が緑色の書道液をたっぷり含ませた大筆をためらいなく紙に打ち込み、豪快に「生きる」と書いて作品を仕上げました。2作品目は、

立原心胡さん(2年)が「開幕」の文字を、いったん逆方向に筆を入れる隷書体の特徴的な「逆筆」という技法を使って力強い線で書き上げていきます。この筆使いも見どころの一つ。

このように、展覧会で作品を鑑賞するときには見ることでできない、作品を生み出す瞬間の書き手の姿と、作品が完成していくプロセスを目の当たりにできるのが、書道パフォーマンスの醍醐味です。

書き手の達成感と観客の感動

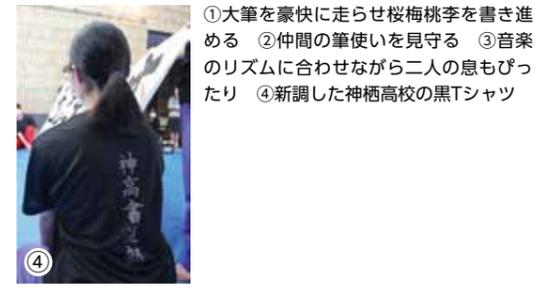
作品を書き上げて緊張から解放された生徒たちと、感動の余韻に包ま



卒業を控えた本間さん

れている観客に感想を聞きました。「練習の成果を発揮できたとし、部員のみならずいつもより楽しそうでした。今日が最後の部活で、高校生活の貴重な思い出ができました」と語る神栖高校の本間さん。前列で見えていたご家族も「ずっと書道を習ってきて、今日が集大成。後輩が増え書道パフォーマンスができて良い経験になったと思います」と優しく見守っていました。これから書道部を引っ張っていく村上舞桜さん(2年)は「先輩が卒業するのは寂しいけれど、これからも一人ひとりの個性を生かせるような作品を作っていきたいと思います」と頼もしく話してくれました。

波崎高校書道部の篠本莉央さん(2年)は「練習のときよりもみんなの動きがスムーズで、美しく作品を仕上げるのができたと思います。書くときは下を向きがちなので、最初と最後に礼をする時はしっかり観客の皆さんを見て、気持ちを伝えるようにしました。皆さんに喜んでくれてうれしいです」と笑顔を見せ



①大筆を豪快に走らせ桜梅桃李を書き進める ②仲間の筆使いを見守る ③音楽のリズムに合わせながら二人の息もぴったり ④新調した神栖高校の黒Tシャツ